第Ⅱ部

平成16年度
核兵器廃絶平和都市宣言20周年
記念公演「戦争体験談」

核兵器廃絶平和都市宣言20周年
記念公演「戦争体験談」

平成16年12月18日（土）、文化会館小ホールで、核兵器廃絶平和都市宣言20周年記念公演を開催しました。この公演において、戦争の時代の中で、市民が体験した「あの日、あの時の、あの気持ち」を4人の方に語っていただきました。

出席者

比留川信次郎氏、加藤　貢氏、栗原タカ氏、青木美三男氏

1　あの時のあの気持ち

司会　皆さん、こんにちは。

これより、「伝えていきたい戦争の記憶」と題しまして、4人の方にご自身の戦争体験として、「あの日、あの時の、あの気持ち」をお聞きしていきたいと思います。

昭和20年、西暦1945年の8月6日に広島、9日に長崎に原子爆弾が投下されたことをきっかけとして、8月15日、昭和天皇の玉音放送をもって、連合国軍への無条件降伏が宣言され、太平洋戦争が終わりました。これにより、朝鮮・中国を始め、インドシナ半島から太平洋上の諸国に侵攻していった15年にわたる戦争の時代が終わったわけです。

さて、本日の4人の出演者の皆様に、お聞きしたいと思います。「終戦のとき、8月15日当時、どこで何をしていましたか？そしてその時、どんなことを感じましたでしょうか？」

まずは、深谷の比留川信次郎さんにお聞きします。比留川さんは、終戦のとき、どんなお気持ちでしたか？

比留川　こんにちは。私は、比留川信次郎と申します。

私は、昭和19年5月に徴兵検査を受け、9月には横須賀の竹山第2海兵団に入団しました。海兵団は、全国の鎮守府から集った部隊で、1ヶ月の訓練のあと、当時の電波学校、今の「いすゞ」で訓練を受けまして、「電探兵」として厚木航空隊に配属されました。「電探」というのは、電波探知機捜査のことで、今で言うレーダーによる情報収集が任務でした。

そのため、終戦につきましては、厚木基地で聞きました。

当時は、国を挙げての戦闘体制のなかで、血気盛んな若者であった私には、大きなショックでした。今までのことは一体何だったのか？これから世の中はどうなってしまうのか？など、頭の中は混乱し、気の抜け

たような日々を送っていたと記憶しています。

司会　比留川さん、ありがとうございました。

それでは、吉岡の加藤貢さんにお聞きします。加藤さんは、終戦のとき、どんなお気持ちでしたか？

加藤　こんにちは、加藤貢といいます。よろしくお願いいたします。

私は当時まだ18歳でして、相模原にあった相模陸軍造兵廠技能者養成所で、いろいろな工業技術を身に付けるため、勉強をしていました。時局が緊迫していくなかで、学徒勤労隊や女子挺身隊・一般徴用として、労働力不足を補っている時期でもあり、生産従事として働いていました。

終戦のときは、2歳年上の兄が戦死していたこともあり、まず将来が不安で、大変心細い思いでいたことを憶えています。自分の生活はどうなるんだろうか？自分の家はどうなるんだろうか？自分の町や、この日本という国は一体どうなってしまうんだろうか？そして悲しいことに、そういうことを考える「すべ」もありませんでした。

司会　ありがとうございました。続いては、小岡の栗原タカさんにお尋ねします。栗原さんは、昭和20年、終戦のときは何をしていましたか？そのとき何を感じましたか？

栗原　こんにちは、栗原タカと申します。よろしくお願いいたします。

私の実家は相模原の農家でしたが、私は徴用ということで女子挺身隊として動員されていました。命令により鶴見の鋳物工場で働きながら、川崎での寮生活をしておりました。終戦のころは、毎日のように空襲があり、そのたびに避難することになり、大変怖い思いをしておりました。

写真16　左から比留川氏、加藤氏、栗原氏、青木氏

終戦と聞いたときは、「ああ、これで安心して農業ができる。もとの静かな生活に戻れる」と、ほっとしました。そして、その反面、これからは本当に穏やかな生活ができるのだろうか？日本という国は一体どうなってしまうのか？不安でたまりませんでした。

司会　ありがとうございました。

次は、深谷の青木美三男さんにお聞きします。青木さんは、終戦のとき、どこで何をしていましたか？終戦を聞いてどんな気持ちでしたか？

青木　こんにちは、青木美三男です。よろしくお願いします。

私は、昭和16年に徴兵検査に合格し、東京の東部第6部隊に入隊し、軽機関銃の射手として戦地を転々としておりました。

終戦のことは、昭和20年の11月に、インド洋の無人島で知らされました。長距離の行軍と突然始まる戦闘のなかで、そのときにはもう食料がまったくなく、草や虫で食いつないでいました。終戦を告げた司令官

を知り、家族一同は驚愕いたしました。頼りにしていた長男の戦死に直面して、両親始め家族はまさに途方にくれていました。そのときの両親の気持ちを思うと、今も心が痛みます。

その後、多くの当時の上官や戦友の方々に、毎年のようにお墓参りに来ていただき、大変ありがたく感謝しております。

司会　加藤さん、ありがとうございました。何年たっても忘れないでいてくれると言うことは、本当にありがたいことですね。

さて、栗原タカさんにお尋ねします。栗原さんは、徴用作業のために寮生活をしていたそうですが、どんな様子でしたか？

栗原　私は、初めての寮生活と、鋳物工場での重労働で、毎日疲れ果てていました。鋳物工場での力作業は、体がきしむほど大変厳しいものでした。

そして、終戦間近になると、空襲が激しくなりまして、工場での作業よりも、空に広がるB29爆撃機の来襲に、逃げ込む防空ごうもなく、近くのお宮の森に皆で避難しましたが、それは、大変恐ろしい思いをいたしました。夜は照明弾がまるで昼間のように辺りをこうこうと照らし、翌日見てみると、畳1畳ほどもある大きな穴があいていました。また、昼間は昼間で、艦載機が工場すれすれの低空で飛び、機銃掃射をいたしました。飛行機を操縦している兵隊が良く見える程の低空飛行で、怖くてたまりませんでした。

司会　鶴見あたりといいますと、空襲で焼け野原になったと記憶していますが？

栗原　空襲は日増しに激しくなりまして、一時は外泊といって自宅に帰っていたことがありましたが、列車で戻る途中で空襲に遭い、車両から飛び降りて避難したこともありました。やがて工場が空襲で焼けてしまい、自宅に戻ってまいりました。

戦後になって、復員兵であった今の夫のもとに嫁いで参りまして、生活物資がない時代のこと、苦労続きの当時のことは今でも忘れません。

司会　栗原さん、ありがとうございました。何かにつけ、辛かったことが今でもおありになるということですね。

次は、青木美三男さんにお聞きします。青木さんは、過酷な戦場を経験してきたということですが、どのようなものでしたか？

青木　入隊してからの生活は、軍隊という特別な精神状態にありました。初めの訓練から厳しいもので、基礎体力づくりから戦闘訓練まで、毎日くたくたになるほど疲れました。さらには、軍隊特有の上下関係と集団責任の厳しさには戸惑いました。何かといっては、上級兵にこん棒で殴られる毎日でした。ついていくことができず、自らの命を絶つ者もおりました。

戦地は、朝鮮・満州から中国に入り、サイゴン・シンガポールと転戦していきました。異国での長距離の移動と、いきなり始まる激しい戦闘に、緊張した毎日の中で、何人もの戦友が亡くなっていきました。

司会　インド洋の無人島で、終戦になったそうですが、その後は、捕虜となったわけですね？

青木　昭和21年の5月に帰国するまで、捕虜生活をしていました。戦争中は食料がまったくなく、そのうえ敵と遭遇すれば殺され

るかもしれないという、悲惨な状態でした。捕虜になってからは、先行きの不安はありましたが、食べ物もあり、戦闘の緊張感もなく、身体的にはむしろ楽な生活でした。

しかしながら、降伏できずに死んでいった戦友や、帰国の船の中で死んでいった兵士もおり、私にとって戦争の記憶は、あまりにもつらい思い出です。今でも戦争の話はしたくありません。普段は戦争での出来事は話題にしませんが、本日は少しだけお話させていただきました。

司会　青木さん、ありがとうございました。

3　平和の願いを伝えたい

司会　皆さん短時間ではとても語り尽くせない、辛い様々な思いがおありと思いますが、最後に、「子どもや孫に伝えていきたい気持ちや言葉・メッセージ」がありましたら、お聞きしたいと思います。

まずは、比留川さんからお願いします。

比留川　核兵器は、罪のない人間を大量に殺す恐ろしい道具です。今ある核兵器を減らしていくこと、そして、新たに造らないことが大切です。

戦後、日本が国としてひとつにまとまり、経済的にも立ち直りました。この平和を大事にしたいと思います。

司会　加藤さん、お願いします。

加藤　私は、戦争は人の運命を狂わせるものと思います。大変怖いものです。

2度とあんな目にはあいたくありません。また、子や孫にもそんな経験をさせたくはありません。

司会　栗原さん、お願いします。

写真17

栗原　私は、おかげさまで、今、何不自由なく幸せな生活を送っています。それは、戦後、みんなが一生懸命に努力してきたたまものだと思います。この平和な毎日に感謝し、大切に守っていきたいと思います。

司会　青木さん、お願いします。

青木　私が戦争を経験して伝えたいこととは、戦争は何があってもしてはいけないことだということです。戦争は恐ろしいものです。戦争は人間性を壊してしまうものだからです。

司会　どうも比留川さん、加藤さん、栗原さん、青木さん、本日は本当に貴重なお話をありがとうございました。

戦争を知らない世代が多数を占める今日ではございますが、会場の皆様も「本当の平和とは何か？」本日を機会に、もう一度、それぞれご自身の立場で、考えていただければ幸いでございます。

本日の市民が語る戦争体験談「伝えていきたい戦争の記憶」は以上で終了でございます。ご静聴ありがとうございました。

（司会　男女共同社会課長　柳島政子）